
ポケットモンスター ～お嬢様とレックウザ～

まどろみ猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター ～お嬢様とレックウザ～

【Nコード】

N4861Z

【作者名】

まどろみ猫

【あらすじ】

無気力・無表情なお嬢様の、十六歳の誕生日。仕事で滅多に屋敷に帰ってこない父から送られてきた誕生日プレゼントは、伝説のポケモン・レックウザだった！？ポケモンを持ったことなどないお嬢様、自分には資格がないと逃がそうとするが、人語を理解するどころか話すこともできるレックウザに気に入られてしまい…！？

自分の生きることの意味を見いだせなかったお嬢様が、人と触れ合い命の大切さを学んでいく。ポケモンと人は、どのような関係であることが理想なのか？生きる意味は見つかるのか？

ジヨウト地方での、知られざる少女の成長の物語。

誕生日（前書き）

ポケモンで、書きたいと願っておりましたまどろみ猫です。夢が叶って嬉しいです。

私は少しでも上達したいので、よろしかったら感想やアドバイスをお願いします。厳しいコメントも、自らの糧としていきたいと思っております。が、登場人物に対する批判はおやめください。

至らぬ点は多々あると思いますが、よろしかったらご覧ください！

誕生日

私の名前はカノン。自分で言うのも何だが、お嬢様だ。…外見は、そうは見えないだろうけど。

私の住んでいるジョウト地方は、なかなか住みやすい地方らしいらしいというのは、私はこの地方はおるか、自宅である屋敷からも滅多に出ないからだ。

出でることなどないし、したいこともない。だから、毎日の学習を終えると無意味に時間を潰す。昼寝をしたり本を読んだりピアノを弾いたりテレビを観たり…だらだらと、時間が過ぎていく。

両親もいない、友達もいない、ポケモンも持っていない私の話し相手は、屋敷で働くメイドさん達くらい。まあ、話すこともないけど。

「お嬢様。旦那様から、小包が届きました」

春の、日差しの心地よい午後。ソファに寝そべって惰眠を貪っていた私は、主であるパパに代わって屋敷を管理している万能執事・ラストの声に目を覚ました。

「…ラスト。仮にも十五歳のレディの部屋に、ノックもなしで入ってくるなんて無礼じゃなくて？」

眠い目を擦りながら、一応抗議する。

「ノックをしても、お返事がなかったもので。…それに、お嬢様はまだまだ子供ですよ」

ふふふつと含みのある笑い方。明らかに、私の発育を笑っている。…まな板じゃ、子供扱いされてもしょうがないか。特に怒りもせず、手を差し出す。

「そうね。私は子供ね。…パパから便りがあるなんて、珍しいわ」
頂戴と、差し出した手。恭しく渡されたのは、綺麗にラッピングされた小さな箱。

「何かしら？…あら、カードがついてる」

広げて、声に出して読む。ラストも、内容が気になるだろうから。「何々…カノン、誕生日おめでとう！十六歳になったカノンに、パパからプレゼントだ！きつと驚くぞ！カノンの誕生日を祝えないのが残念だが、パパはいつでもカノンのことを想ってるぞ！帰る日ができたら、連絡するからな！」…ああ、今日は私の誕生日だったの？」

読み上げてから、ソファの横で控えるラストに訊く。

「…お嬢様、ご自分の誕生日をお忘れにならないでください」

心底呆れた顔のラスト。若いが無能なこの執事、顔までいいのだから、よほど神様に愛されている。

ただラストにとって不運だったのは、敬愛する主人に仕えることができず、私のような娘の面倒を見なくてはいけなかったことだ。

「私の生まれた日に、何か意味があるの？」

生まれてきた日に、生まれたことに、何の意味があるというの？

「…お嬢様、旦那様が悲しまれますよ」

私の言葉の意味を察してか、ラストは眉をひそめた。でも、それもどうでもいい。

そう、すべてがどうでもいい。私は何の為に生きているのか、わからずただ生きているだけなのだ。

無意味に、無気力に。ただ、生きるだけ。

「…旦那様からのプレゼント、ご覧にならないのですか？」

ごろん、とまたソファに寝転がった私。そのまま微睡むつもりだったのだが、ラストの声に妨害された。

「どうやら、『私が驚く』プレゼントに、興味があるらしい。」

「ラスト、見たい？」

箱を渡そうとすると、首を振られた。私へのプレゼントなのだから、私が開けなくてはいけないのだそうだ。

「…わかった。開けるわね」

普段無表情の私が、驚くものとはなんだろうか？

「これは…モンスターボール？」

小さな箱に入っていたのは、見慣れた物体だった。ただし、変わった色の。

「紫色のボール…パパがいる地方では、これが普通なのかしら？」

そつと持ち上げてみる。意外にも重い。

「ねえラスト。Wの文字があるわ…ってどうしたの？」

隣にいたラストは、食い入るようにそのボールを見つめていた。思ったたら、その目が輝きだす。

「これはっ！マスターボールですよお嬢様！」

「マスターボール…ポケモンを必ず捕獲できるという、幻のボール？」

トレーナーではない私だが、知識はある。この万能執事に叩きこまれた知識が。

「さすが旦那様！お嬢様の為にこんな希少なボールを入手されるとは！」

ラストが興奮し始めた。冷静沈着な彼は、パパが絡むと豹変する。

「でも、このボール未使用なのかしら？」

振っても、音はしない。それはそうか。

「それに、私ポケモンをゲットしたりはしないし…ラスト、あげる」
渡すと、ポッポがタネマシンガンを食らったような顔をするラスト。と思ったら、狼狽して突っ返してきた。

「だ、だめですよお嬢様！これは、旦那様からのプレゼントなのですから！」

優秀なトレーナーでもある彼なら、有効に使ってくれると思ったのだが…。

「そ、そうですよ！マスターボールがプレゼントだとは思いますが、一応中身を調べなくては！」

…素直に、受け取ればいいのに。私は、要らないのだから。

屋敷には、ポケモン転送装置がある。一般家庭にはまずないが、

パパがお仕事で使っているのだ。

使ったことがないので、ラスタに操作してもらおう。慣れた指捌きでキーボードを打つと、装置に紫色のボールをセットした。

「中にポケモンが入っていたら、画面に名前と姿が表示されます。

…楽しみですね」

につこり微笑みかけてくるラスタ。子供みたいだ。

「…では、お願い」

「はい！」

たたたたと、彼の長い指が素早く動いた。そして、画面に表示されたのは…

「…レックウザ。伝説の、ドラゴンポケモン？」

「…お嬢様！もつと驚いてくださいよおおおおおっ！」

まったく表情を変えない私に、ラスタがツッコむ。

「レ、レックウザですよ！？ホウエン地方で語り伝えられる、幻のポケモンですよ！？」

ラスタ、驚いてるわと思いつつ、こくりと頷く。

「知っているわ。読んだ本に壁画が載っていて、こんな風だったわ」
画面を指差す。長い筒状の鮮やかな緑の身体、二本の鋭い爪のついた手、これまた鋭い牙が生えた口。

「パパ、ホウエン地方にいるのかしら？」

「そこじゃないですよお嬢様」

平静を取り戻したラスタに突っ込まれる。

「…それにしても、まさかレックウザとは…さすがです旦那様！このラスタ、一生ついていきます！」

…まだ混乱しているようだ。

「…ラスタ、ついてきてくれる？お庭で、レックウザをボールから出したいのだけれど…」

こんな状態の彼では正直頼りないが、屋敷で一番ポケモンの扱いに長けているのも彼なので、同行を頼む。

「…へっ！？レックウザを、ボールから出す！？」

∴それから、小一時間お説教が始まった。

誕生日（後書き）

読んで下さった方、ありがとうございます！

え、なぜにレックウザ？と尋ねられれば、好きだからとしかお答えできません。可愛いですよねレックウザ！

シリアス、ほのぼの、ギャグ、冒険、友情、恋愛…これらの要素を含めて、頑張りたいです。

他の作品も投稿していますので、よろしかったら…その、そちらも…どうぞ。

レックウザはお怒りのようです(前書き)

お気に入り登録してくださった方がいらっしやっただようで、驚きました。ありがとうございます!でも、その…よろしかったら、今後の精進のために感想を頂きたいな、と…。お願いします!上達したいのです私!

今回で、ようやくレックウザが登場します。…氷技で一撃、なんて言わないでくださいよ!?弱点がないポケモンなんて、悪&ゴーストタイプだけです!

レックウザはお怒りのようです

「よろしいですかお嬢様？伝説のポケモンとは、他のポケモンとは一線を画した存在なのです。その能力たるや凄まじく、天災を引き起こしたりもします。ポケモンをお持ちになつていないお嬢様が、このレックウザを従えるのは、不可能でしょう。なぜなら……」

口をはさむ隙がない。かれこれ一時間は話し続けている。

「……ですから、レックウザをボールから出すのは、旦那様がお帰りになったときでなくては。暴走した場合、このお屋敷は壊滅し、辺り一面は火の海になるでしょう。旦那様は、私など比較にならないほど優れたトレーナーでもあられます。その日まで待つて……」

「……やだ」

呟くと、ラストの説教じみた説得は中断された。

「……お嬢様？」

「パパがいつ帰って来るかもわからないのに、ずっとこのレックウザを閉じ込めておくの？私はこのレックウザを逃がしたい。このレックウザも、そう思ってるはずよ」

紫色のボール。人からすれば夢のようなこのボールは、ポケモンからすれば悪夢のようなボールだろう。

投げられたら、そこでお終い。パパがこのレックウザとバトルしたのかは知らないけれど、どれだけ悔しかっただろうか。

抗つても、強制的に押さえつけられ、捕獲される。そんなのは。

「……ラスト、教えてくれたわよね。ポケモンと人は、主従の関係ではなく、対等なのだ。お互いを認め合い、歩み寄り、協力するのが真の姿だと。……嘘じゃないわよね？」

ポケモンの優れた力を、道具とみなし利用する人もいる。それは、知っている。

「……私は、このレックウザと対等になれるような人間じゃないの。トレーナーとしてどころか、人としても欠けている私には。だから

…」
勝手なことを言っているのは、わかっている。パパは私の為にこのレックウザを捕獲し、私は私の考えでこのレックウザを逃がそうとしている。

私達親子の都合に振り回されるレックウザからしてみれば、たったものではないだろう。

「…お嬢様」

顔を上げると、ラストが辛そうな顔をしていた。何で？

「わかりました。このラスト、お嬢様のお心のままに」

一礼すると、ラストは私の手を取った。

「…ご安心ください。お嬢様は、私がお守りします」

庭へと向かう彼に手を引かれている私は、その背中ににじむ覚悟に、罪悪感と感謝の念を抱いた…。

屋敷の使用人を全員避難させ、敷地内にいるのは私とラストと、彼のポケモン達だけ。

「…さあ、お嬢様。ボールを投げてください」

緊張に顔を強張らせた彼。その隣で闘志まんまんな、彼のライチユウ。

「…ごめんなさい。ラスト」

こんなの、執事の仕事じゃない。命を懸けてまで、彼が私に付き合うことはない。

私一人なら、どうなったってかまわない。でも、彼は違うはずだ。彼を必要としている人は、確かにいる。

謝ってすむことではないけれど、謝罪の言葉が勝手に出ていた。

驚きに目を見開く彼を横目に、ボールを投げる。…全然とばない。数メートルの距離に落下したボールから、かっと光が発せられる。

「ぐおおおおおおおおおおおん！！」

轟いたのは、咆哮。あまりにも大きなその声に、耳を塞ぐ。

「ぐるるるるる…」

唸り声。巨大な伝説のポケモンが、目の前にいた。細長い筒状の身体は鮮やかな緑色で、黄色の輪のような模様がある。私を見つめる瞳は爪や牙と同じく鋭く、恐ろしい。

恐ろしい。けれど、何と雄大な姿だろうか。

私は、見惚れていた。その巨大で、美しい姿に。その、命の輝きに。

「貴様が、あの男の娘か？」

突如として頭の中で響き渡った、若い男性の声。まさか、誰かいるの？

辺りを見回しても、目に入るのは綺麗に整備された庭と、レックウザと、ラスタとライチユウだけ。誰も、いない。

「お、お嬢様？どうされたのですか？」

レックウザを警戒しながらも、私を気遣うラスタ。彼には、今の声が聞こえなかったのだろうか？

「今、男の人の声が……」

「それは吾輩だ」

また、聞こえた。やっぱり、誰かいる。

「吾輩？……レックウザ、あなた話せるの？」

「ふん。話してはおらん。……まあ、テレパシーのようなものだ。その男には聞こえておらんぞ」

ぶんと尻尾を振ると、風圧が生まれて髪が乱れる。すごい風圧だ。

「吾輩の質問には、しっかりと答える。貴様が、あの男の娘かと訊いた」

「あの男？」

聞き返すと、苛立ったように尻尾を地面に叩きつける。どれほどの力で叩いているのか、地面が揺れる。

「吾輩を、貴様が手にしたそれで捕らえた男だ」

それ、とはマスターボールのことだろう。忌々しげに紫色のボールを睨むレックウザ。

「…ええ。あなたを捕獲したのは、私のパパだと思うわ」
その瞬間。とてつもない殺気を感じた。

「お嬢様！」

ラストに腕を引かれ、私の立っていた場所にレックウザの尻尾が叩きつけられる。先程の比ではなく、地面が抉れた。

助けてもらわなくては、死んでいた。

「…ありがとう、ラスト」

「お礼など結構です！」

背後に私をかばい、ラストがレックウザを睨みつける。ライチュウが、頬袋からビリビリと微かに放電している。

「…これしき、自らで避けることもできないか。貴様如きが、この吾輩を従えようなど笑止千万！」

向けられた視線には、侮蔑がこもっていた。テレパシーが通じていないラストにも、それがわかつたらしい。

「…お嬢様、レックウザは何と言ったのです？」

「この程度、自分で避けられないのか。貴様などが私を従えようなど、笑わせるな！…と言っているわ」

レックウザの言う通りなので、淡々と伝える。従えるつもりはないけれど。

「吾輩を従えるどころか、貴様のような虚ろな娘に仕えねばならんその男も不憫よ。あの男に仕えればよいものを…人間の、事情というやつか？」

小馬鹿にしたように、レックウザが笑う。黒く縁どられた口が吊り上がったので、おそらく笑ったのだろう。

「…お嬢様」

通訳を、と目で乞われ、そのまま伝える。

「私を従えるどころか、貴様のような空っぽな娘に仕えなくてはならないその男も不憫だな。娘の父親に仕えればよいのに…人間の事情というやつか?…と言っているわ」

「…何ですって?」

ラストの雰囲気が変わった。…怒った、のだろうか？

「…伝説のポケモンだからって、好き勝手言ってくれますね。こんな人を見る目もない子蛇に、マスターボールを使う価値なんてありませんよ」

「何だと!？」

レックウザが、怒りの声を上げる。今しがたまで侮蔑を浮かべていた目は、憤怒に染まっていた。

「人を見る目がない、と言ったのです。お嬢様は、一見すると無気力で何もする気のないダメ人間のようですが、とても優しいお方です。そのことに気付きもしないあなたに、よく伝説なんて大層な呼び名が付いたものですね」

「ふん！優しいだど!？己の力もわきまえぬ人間が、偽善に酔っているだけであるうが!」

吐き捨てるように、レックウザは言った。

「実に下らぬ!」

張り詰めたような緊迫感。のどかな庭にはまったく似合わない。

…私は、戸惑っていた。ラストの言葉に。

優しい？私が？

「お嬢様。この子蛇の通訳を、お願いします」

戸惑う私そつちのけで、睨み合う両者。

「…えっと…優しさなど、己の力もわきまえない人間が、偽善に酔っているだけだ。下らない…ですって」

私の訳を聞いたラストは、腕を組んで笑った。

巨大な身体を見上げるその目にあるのは、勝ち誇ったような色。

「…やはり、人を見る目がありませんね。お嬢様は、自らの行為に酔いしれるような愚かな方ではありません。この方の真なる優しさを、そんな低俗なものと捉えるあなたのほうが、己をわきまえるべきですよ」

「…調子にのりすぎだ、人間!」

レックウザの怒りが、爆発した。通訳なしだが、ラストにはその

咆哮の意味がわかったらしい。

開戦の、咆哮。

「…上等です！私の主を侮辱したことを、後悔しなさい！」
こうして、戦いは始まった…。

レックウザはお怒りのようです（後書き）

：カノンお嬢様そっちのので、レックウザとラストが喧嘩してま
すね。正直言つて、彼の存在は一話限りでした。しかも、名前なし
のただの執事です。ですが、話を進める上で彼の存在が必要になっ
てくることに気が付き、こうして立派な主要人物となりました。考
えた人物は全員好きですが、彼もなかなかお気に入りです。

今のところ、人物の容姿の描写はなしですが、これからの話でし
ていきます。現在わかるのは、カノンお嬢様がまな板ということぐ
らいでしょうか（笑）。

ポケモン大好きなのにバトルは苦手。こんなまどろみの作品です
が、楽しんでいただけたら嬉しいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4861z/>

ポケットモンスター ~お嬢様とレックウザ~

2011年12月17日02時03分発行